

僧尼の歌・文字技巧

北川 和秀

◎僧尼の作った歌

【三方沙弥】

三方沙弥、園臣生羽の女を娶きて、未だ幾の時を経ずして病に臥して作る歌三首

① たけばぬれたかねば長き妹が髪この頃見ぬに搔きれつらむか 三方沙弥（二・一二三）

② 人は皆今は長しとたけと言へど君が見し髪乱れたりとも 娘子（一二四）

③ 橘の蔭履む路の八衢に物をそ思ふ妹に逢はずて 三方沙弥（一二五）

三方沙弥の歌一首

④ 衣手の別く今夜より妹もわれもいたく恋ひむな逢ふよしを無み（四・五〇八）

⑤ 橘の本に道履む八衢にものをそ思ふ人に知らえず（六・一〇二七）

右の一首は、右大弁高橋安麻呂卿語りて曰はく、故豊島采女の作なりといへり。

但し或る本に曰はく、三方沙弥の、妻苑臣に恋ひて作る歌なりといへり。然らばすなはち、豊島采女は、当時当所に此の歌を口吟へるか。

⑥ あしひきの山道も知らず白檀の枝もとををに雪の降れば 或いは云はく、枝もたわたわ

（一〇・三三一五）

右は柿本朝臣人麻呂の歌集に出づ。但し件の一首のみは、或る本に、三方沙弥の作なりといへり。

⑦ 大殿のこの廻の雪な踏みそね しばしばも 降らざる雪そ 山のみに 降りし雪
そ ゆめ寄るな人や な踏みそね雪は（一九・四二二七）

反歌一首

⑧ ありつつも見し給はむそ大殿の此の廻の雪な踏みそね（四二二八）

右の二首の歌は、三形沙弥、贈左大臣藤原北卿の語を承け、依りて誦めり。

聞きて伝ふるひとは、笠朝臣子君なり。復後に伝へ読むひとは、越中国の掾久米朝臣広繩是れなり。

＊「贈左大臣藤原北卿」は藤原房前。房前は鎌足の孫で、不比等の子。

【弁基】

弁基の歌一首

○亦打山夕越え行きて廬前の角太河原に独りかも宿む（三・二九八）

右、或は云はく、弁基は春日蔵首老の法師の名そといへり。

＊僧弁紀を還俗せしめ、代へて一人を度す。姓春日倉首、名老を賜はり、追大壺を授く。

（続日本紀大宝元・三・一九）

【博通法師】

博通法師、紀伊国に往きて、三穂の石室を見て作る歌三首

①はだ薄久米の若子が座しける 一に云ふ、けむ 三穂の石室は見れど飽かぬかも 一に云ふ、荒れにけるかも（三・三〇七）

②常磐なる石室は今もありけれど住みける人そ常なかりける（三〇八）

③石室戸に立てる松の樹汝を見れば昔の人を相見るごとし（三〇九）

【通観僧】

或る娘子等、裹める乾鰯を贈りて戯れに通観僧の咒願を請ふ時、通観の作る歌一首

①大海の沖に持ち行きて放つともうれむそこれが生還りなむ（三・三二七）

釈通観の歌一首

②み吉野の高城の山に白雲は行きはばかりてたなびけり見ゆ（三・三五三）

【沙弥満誓】

沙弥満誓、綿を詠ふ歌一首 造筑紫観音寺別当、俗姓笠朝臣麻呂といふ

①しらぬひ筑紫の綿は身につけていまだは著ねど暖かに見ゆ（三・三三六）

沙弥満誓の歌一首

②世間を何に譬へむ朝びらき漕ぎ去にし船の跡なきがごと（三・三五一）

造筑紫観世音寺別当沙弥満誓の歌一首

③鳥総立て足柄山に船木伐り樹に伐り行きつあたら船材を（三・三九一）

満誓沙弥の月の歌一首

④見えずとも誰恋ひざらめ山の末にいさよふ月を外に見てしか（三・三九三）

梅花の歌三十二首 序を并せたり（そのうちの一首）

⑤ 青柳梅との花を折りかざし飲みての後は散りぬともよし 笠沙弥（五・八二一）

大宰帥大伴卿の京に上りし後、沙弥満誓、卿に贈る歌二首

⑥ まそ鏡見飽かぬ君に後れてや朝夕にさびつつ居らむ（四・五七二）

⑦ ぬばたまの黒髪変り白髪ても痛き恋には会ふ時ありけり（五七三）

＊右大弁従四位上笠朝臣麻呂、太上天皇の奉為に出家入道せむことを請ふ。勅して許す。（続日本紀養老五・五・一二）。「太上天皇」は元明太上天皇。当時病が篤かった。この年の十二月七日に崩御。

【僧恵行】

攀ぢ折れる保宝葉を見る歌二首（そのうちの一首。もう一首は大伴家持）

① わが背子が捧げて持てる厚朴あたかも似るか青き蓋（二九・四二〇四）

講師僧恵行のなり。

【元興寺の僧】

（天平）十年戊寅、元興寺の僧の、みづから嘆く歌一首

① 白珠は人に知らえず知らずともよし知らずともわれし知れらば知らずともよし

（六・一〇一八）

右の一首は、或いは曰はく、元興寺の僧、独り覺りて智多けれども、顯聞するところあらず、衆諸狎侮りき。これによりて、僧この歌を作りて、みづから身の才を嘆くといへり。

【沙弥】

沙弥の霍公鳥の歌一首

① あしひきの山霍公鳥汝が鳴けば家なる妹し常に思ほゆ（八・一四六九）

【法師】

僧を戯れ嗤ふ歌一首

① 法師らが鬢の剃杭馬繋ぎいたくな引きそ僧は泣かむ（一六・三八四六）

法師の報ふる歌一首

② 檀越や然も言ひそ里長が課役徴らば汝も泣かむ（三八四七）

【尼】

尼の、頭句を作り、大伴宿祢家持の、尼に誂へらえて末句を續ぎて和ふる歌一首
○佐保川の水を塞き上げて植ゑし田を 尼作る 刈る早飯は独りなるべし 家持續ぐ

(八・一六三五)

＊万葉集中唯一の連歌。

《参考》

(倭建命は) 即ち、其の国より甲斐に越え出でて、酒折宮に坐しし時に、歌ひて曰はく、

新治 筑波を過ぎて 幾夜か寝つる

尔くして、其の御火焼の老人、御歌に續ぎて、歌ひて曰はく、

日々並べて 夜には九夜 日には十日を

是を以て、其の老人を誉めて、即ち東国造を給ひき。(古事記 景行)

【沙弥尼】

故郷の豊浦寺の尼の私房に宴する歌三首

①明日香川行き廻る岳の秋萩は今日降る雨に散りか過ぎなむ(八・一五五七)

右の一首は、丹比真人国人のなり。

②鶉鳴く古りにし郷の秋萩を思ふ人どち相見つるかも(二五五八)

③秋萩は盛りすぐるを徒らに挿頭に挿さず還りなむとや(一五五九)

右の二首は沙弥尼等のなり。



①の歌の二句目の原文は「逝廻丘」で、今日この三文字は「ゆきみるをか」が定訓となっているが、平安時代以来この三文字は「ゆききの岡」と訓まれ、歌枕として近代に至るまで作例があり、その所在地についても岡寺の岡であるとしたり、大字「岡」と「飛鳥」との間地名などとされてきた。

◎万葉集の文字技巧

【同語異表記】

① 輕池之 納廻往転留 鴨尚尔 玉藻乃於丹 独宿名久二（三・三九〇）紀皇女
輕の池の浦廻行き廻る鴨すらに玉藻のうへに独り宿なくに

② 淑人乃 良跡吉見而 好常言師 芳野吉見与 良人四来三（一・二七）天武天皇
よき人のよしとよく見てよしと言ひし芳野よく見よき人よく見

③ 紅尔 深染西 情可母 寧乃京師尔 年之歴去倍吉（六・一〇四四）

世間乎 常無物跡 今曾知 平城京師之 移徙見者（一〇四五）

石綱乃 又変若反 青丹吉 奈良乃都乎 又将見鴨（一〇四六）

紅に深く染みにし情かも寧樂の京師に年の経ぬべき

世間を常無きものと今そ知る平城の京師の移ろふ見れば

石綱のまた変若ちかへりあをによし奈良の都をまた見なむかも

【掛け算の九九】

① 二八十一不在国（憎くあらなくに）（一一・二五四二）《9×9＝81》

② 朝獺尔 十六履起之（朝狩に鹿猪履み起し）（六・九二六）山部赤人

《4×4＝16》

③ 生友奈重二（生けりともなし）（六・九四六）山部赤人《2×2＝4》

【動物の声など】

○ たらちねの母が飼ふ蚕の繭隠りいぶ（馬声 蜂音）せくもあるか妹に逢はずして

【数字満載】

① 海津路乃 名木名六時毛 渡七六 加九多都波二 船出可為八（九・一七八一）
海つ路の和ぎなむ時も渡らなむ斯く立つ波に船出すべしや 高橋虫麻呂

② 言云者 三々二田八酢四 小九毛 心中二 我念羽奈九二（一一・二五八一）
言にいへば耳にたやすし少くも心のうちにわが思はなくに

【縁字】

○百済野乃 芽古枝尔 待春跡 居之鶯[○] 鳴尔鷄[△]鵲[△]鴨[△]（八・一四三一）
百済野の萩の古枝に春待つと居りし鶯鳴きにけむかも

【文字分解】

○…：わが着たる 衣^{ころも}は穢^なれぬ 見るごとに 恋はまされど 色に山^い上復有山^えば
人知りぬべみ…：（九・一七八七）笠金村

【音義兼用表記】（東歌に多い）

a 「河泊」の「河」

- ①多^た麻^ま河^が泊^は尔^に（多摩川に）（一四・三三七三）武蔵相聞
②知^ち具^ぐ麻^ま能^の河^か泊^は能^の（千曲の川の）（一四・三四〇〇）信濃相聞

b 「古馬」「波由馬」等の「馬」

- ①由^ゆ可^か牟^む古^こ馬^ま母^も我^が（行かむ駒もが）（一四・三三八七）下総相聞
②波^は由^ゆ馬^ま宇^う馬^ま夜^や能^の（早馬駅家の）（一四・三四三九）未勘国雑歌
＊「馬」を音義兼用表記に用いた例は卷十四の例のみ。

c 「楊奈疑」「安乎楊木」等の「楊」

- ①安^あ乎^を夜^や宜^ぎ乃^の（青楊Ⅱ青柳の）（一四・三四四三）未勘国雑歌
②楊^や奈^な疑^ぎ許^こ曾^そ（楊こそ）（一四・三四九一）未勘国相聞など